

ボアジチ大学
交換留学報告書

静岡県立大学国際関係学部

国際言語文化科三年英米コース

私は2017年の9月から、約半年間ボアジチ大学に留学をした。一学期のみというとても短い期間であったが、多くの方の支えがあり充実した時間を過ごせた。トルコでの生活は大変濃いもので、語りつくせない程多くの経験ができたが、ここでは学生生活として大学の授業と、課外活動として旅行先での出来事の二点について報告させていただきたい。

まず、学生生活として大学の授業について書いてゆく。私はトルコでは最高峰と言われているボアジチ大学に通った。ボアジチ大学は設立当時はアメリカの大学であり、現在もその教育方針が受け継がれていて、授業は全て英語で行われていた。私が受講した授業は四つある。そのうちの二つは、留学生用のトルコ語初級の授業、その他は社会科学の入門授業と中東情勢の授業であった。トルコ語初級の授業は、発音から初歩的な文法、日常会話まで幅広い内容を勉強した。トルコ語を勉強したことのない私にとってトルコ語とは未知の世界であったが案外日本語との共通点があるものだと感じた。それはトルコ語の文は日本語と同様SOV語順で構成されているからである。SOV語順とは主語、目的語、動詞の順で単語が並んでいるもので、反対に英語は主語、動詞、目的語で並べるためSVO語順である。ちなみに、トルコ語と日本語のルーツをたどればウラル・アルタイ語族という同じ語族に属しており似ている言語であるようだ。ともかく、私達日本人にとってそういう意味でトルコ語は学びやすい

言語であった。だが、だからといって日本人の学生が他の留学生と比べて特別トルコ語出来たわけではなく、アルファベットに慣れているヨーロッパ出身の学生はリスニングや発音の把握力が速かったし、トルコ語にはアラビア語源のものも多くあるため、アラブ地域から来た留学生にとっては馴染みやすい言語であった。といったように、トルコ語の授業では実に多種多様な留学生と切磋琢磨しながらトルコ語を学ぶことが出来た。この授業では、様々な国から来た生徒がそれぞれの持つ背景を生かして、トルコ語を学んでおりとても新鮮であった。また実際に授業で学んだトルコ語を大学外で使いそれがトルコ人に伝わった時、それは大変嬉しく言語の勉強の楽しさを感じる事が出来た。次に、社会科学入門の授業であるがこれは一年生向けの、広い講堂、大人数で行われるスケールの大きな授業であった。先生は前の講壇に立ち、社会科学の基礎的な内容を生徒とコミュニケーションを取りながら解説していく。時折基本的な概念と現在の情勢を比較したり、冗談を交えながら授業を進めていたのが印象的であった。英語の授業に慣れていなく政治の授業も初めての私にとって授業についていくことは簡単ではなかったが、丁寧に解説してくれたためなんとか単位を取得できた。また、これを機に日本語でしっかりと政治の概念や国際関係の基礎を学ぼうという志を持つようになった。最後に中東情勢の授業である。実はこの授業、履修登録こそしていなかったが先生の承諾を得てなんとか授業に参加をしていたものである。それは三年生の授業であり受講希望者も多いので一定の生徒のみ受講が可能であ

ったためである。内容も難しく、予習も毎週英語の論文を20～80ページ程課されたため私にとっては大きな挑戦であった。今振り返ると私はその授業を受講出来て良かったと思う。大学で学ぶということがどういうことなのか、改めて感じる事が出来たからである。先生の要求することも高かったのだが、なによりそれに答えようとするトルコ人学生の熱意を感じられた授業だった。特に安全保障に関して、トルコ人の学生は強い関心を持っており活発な議論がされていた。いかに、日本が安全であるのか或いは、実はそうではなく平和ボケしているだけで本当は安全保障についてもっと関心を持つべきではないのかとすら考えさせられた。残念ながらこの授業内容を完全に理解することはできなかったが、学問を真剣に学ぶことの大切さと日本という国を新たな視点でみる事が出来た。このように、ボアジチ大学で授業を受講することは学問を学ぶことはもちろんそれ以外にも自分に多くを齎してくれた。

次に、課外の活動として旅行先での出来事であるが、これは私が留学生とともにカッパドキアに団体旅行をした時の出来事である。カッパドキアというと気球や広大な大地とそこにランダムに広がる凹凸の地層をイメージすると思うが、今回は四輪バギーツアーでの出来事を述べたい。カッパドキアはご存知の通りは世界的に有名な観光地でそこには観光客向けの小売店や施設がたくさんある。私は友達の提案で、四輪バギーに乗りカッパドキアの大地を走るというツアーに参加したのだが、バギーを借りにお店に入ると一人の中年男性の店主と7歳ぐらいの少年がいた。どうやら、家族経

営のお店のようだった。私達がツアーに参加したいと伝えるとさっそく二人は準備を始めてくれた。少年は店の奥に行き、父と思われる店主はバギー車のある場所へと招いた。少年が戻ってくると手にはヘルメットとマスクを持っており、私達に渡した。その後バギー車の使い方を教えてもらい、いざ出発となったが恥ずかしながら私はバギー車の運転に苦戦してしまった。すると、すぐにその少年が駆け寄り手際よく教えてくれた。彼は片足で車体に乗し、右側のハンドルを起用に調整し、片言の英語でゆっくりアクセルを動かすよう教えてくれた。少年のアドバイスもあり、無事にツアーを終えられたが、彼のあの時の対応に私はもの凄く感動してしまった。というのも、彼は率先して稼業のお手伝いをしているようで、父と思われる店主は少年に何かをするように頼んだ素振りはなく、少年は素早く自分の役割をこなしていた。その手際の良さには普段から手伝いをしてることが感じられたし、父に何も文句を言わず責任をもって私達に接客をしてくれた姿は大変立派であった。私があの子だったら、あのようにお手伝いは出来ないだろう。さらには親に反抗すらしていたと思う。また、その出来事と同時に私はトルコの暗い側面も感じてしまった。トルコはヨーロッパとアジアの中央に位置し、西に行けば行くほどヨーロッパに近く東にいけばイスラーム世界が広がると言われている。西側は発展しているし、インフラも進んでいるが、反対に東側は経済的に貧困層が多いのが現実である。カッパドキアはトルコの中央に位置するが、どちらかという東側で貧困に苦しむ人々も多い。カッパドキアなどの観光

資源がある地域では、その豊富な観光資源を頼り生活をやりくりする人々がほとんどである。近年、I Sのテロがトルコで起こったことで観光客も大幅に減っておりトルコの観光ビジネスは痛手を負っている。それらの背景がある中でこれはあくまで私の予想だが、彼らのお店の小ささ、着ていた服装からして、店主と少年は決して裕福とは思えなかったし生活に余裕があるようには見えなかった。それを考えると私はとても複雑な気持ちになった。最初はなんて少年は偉いのだろうかと楽観的に思っていたが、その反面稼業に追われていないのか、しっかりと学校に行けているのか心配になった。その日が平日か休日かは覚えていないが、もし彼が学校に行けず十分な教育を得られないのならば、せっかく今一生懸命お手伝いをしているのに、彼の将来はどうなってしまうのかと不安になった。このように、トルコでは親の仕事を子供がお手伝いする家も多いようでそれは貧困ゆえに起こることである。働かないと生活が出来ないため学校に行きたくても行けないというケースである。また、イスタンブールなどの中心部では難民の子供も多く、昼間から街中で物乞いをする子供達もたくさんいる。彼らは将来、どのような大人になるのだろうか。トルコは近年著しく経済成長をとげ、中東の中では比較的安定した国であるが、全ての子供が平等に教育を受けられる社会を作って欲しいと強く願った。反面、小学生から教育を受けられる自分のありがたさも痛い程感じ、大学にだって勉強をしない大学生がいる日本は非常に残念な国だなと思わされた。

最後に、この半年間は今までの大学生活の中で最も刺激的で実りのあった時間であった。様々な状況に直面し時に苦勞したこともあったが、自分の周りにはいつも温かい人々がいて自分を支えてくれた。それは、大学を含め、先生、家族、友達など数えきれない程多くの存在があり、そのおかげで無事に私の留学生活は幕を閉じることが出来た。私を応援してくれた方々、このような機会を与えてくれた皆様、心から感謝を申し上げたい。特に、私をトルコに導いて頂いた静岡県立大学の先生や事務員の方には最大の感謝を示したい。後援会の皆様からはばたき基金や佐藤先生や学生室の方の協力により頂くことができたメブラナ奨学金は、金銭的余裕がない私にとって大きな支えとなった。経済面に関しても支援して頂き感謝申し上げます。私は皆様への感謝の気持ちとともにこの経験を心に刻みこれからの将来を歩んでいきたい。